

執筆者紹介

岡崎由美 (早稲田大學文學學術院教授)

伴俊典 (早稲田大學文學學術院講師 (任期付))

井上一之 (群馬縣立女子大學文學部教授)

榊原慎二 (東北大學大學院修士課程在學)

劉茜 (早稲田大學博士後期課程在學)

郭濟飛 (早稲田大學博士後期課程在學)

段書曉 (早稲田大學文學學術院非常勤講師)

千葉謙悟 (中央大學經濟學部教授)

鋤田智彦 (岩手大學人文社會科學部准教授)

編集後記

◇ 十月下旬からの二ヶ月あまりは慌ただしい。論文査読の依頼、査読報告書を執筆者にもどし修正を依頼、英文タイトルの校閲依頼、出版社への連絡や入稿など、日程をにらみながら原稿を右から左へ、左から右へと送り、編集作業を進めていく。原稿を動かしているだけなのに、何を愚癡つているのかと言われると返す言葉がない。気がつくとも一時間、また一時間、あつというまに時間が過ぎていく。

◇ 編集作業の中でありたいと思うことは多い。論文一本につき二名以上の方に査読を依頼しているが、断られたことがほほえない。早く引き受けていただけただけの時も安堵するが、論文を丁寧に読み込んだ査読報告書を頂戴した時は本當にありがたいと思う。本誌が一定のレベルを保っているとしたら、こうした査読委員のご盡力の賜物である。

◇ 査読を制度化したのはいつからか。「中國文學研究」掲載論文に關する運用細則」には査読について定めがあり、細則の実施は二〇〇七年七月となつている。その少し前から査読の取り組みが始まつていたような氣もつても、記憶がはつきりしない。少なく見積もつても、査読導入から十五年の月日が流れていることになる。この間、査読雑誌としての本誌刊行にご盡力いただいた、すべての方々にお禮申し上げます。多くの人たちのご協力を得て、第四十八期をお届けする。節目の第五十期刊行が目前に迫っている。準備に着手するのが遅れたが、編集委員会で特別記念號の刊行に向けて話し合つてある。本誌の半世紀の歩みに思いを致す昨今である。(杏)